「空飛ぶクルマ」の登場で広がる空の可能性

空飛ぶクルマ/eVTOLとは

■ 電動垂直離着陸型機（eVTOL: Electric Vertical Take-Off and Landing aircraft）

eVTOL（別称「空飛ぶクルマ」）は、都市部の渋滞を避けた通勤通学、離島と本土、山間部と市街地、または災害時等の迅速な人員・物資輸送等を担う**次世代の交通手段**として期待される空飛ぶ乗り物です。様々な種類が開発されていますが、一般的に飛行機と違い滑走路が不要で、ヘリコプターより小さめの複数のローター（回転翼）が搭載されており騒音が小さく、整備が比較的容易である等の利点があります。

eVTOLのイメージ

■ 商用運航はいつから？

日本を含む世界中のベンチャー企業から大企業まで多数のプレイヤーが研究開発や実証実験に様々な形で携わり、日本では2025年の大阪・関西万博会場での商用運航を目指しているeVTOLですが、機体はもとより各種インフラを含む安全性について厚い信頼を得る必要があり、専門家の間では本格的な商用運航が始動するのは2030年代になってからという見方が大勢です。

世界の航空業界をけん引する米国の連邦航空局(FAA)は、今年11月21日にeVTOL運航※1を正式に航空運送業の一種としてFAAの規制対象とすることを提案しました。本格的な商用運航に不可欠となる各種環境整備がようやく動き始めたと言えます。

■ 今後の課題

eVTOLは温室効果ガス排出を低減する移動手段となることも期待されていますが、近距離等でもその性能を発揮するには更なる蓄電・充電技術の向上が必要です。また、操縦・整備に関する要件、各種保険を含む事故発生時の対応、空域に関する制度整備、専用離発着場※2の制度整備等、ソフト・ハード面での環境整備に向けた具体的な検討は始まったばかりです。これらの課題の解決が順調に進めば、将来はタクシー並みの価格での利用も可能とされているeVTOLの商用化・普及拡大で、空の可能性がますます広がることが期待されます。

ITCは今後もリース会社としての立場から**新しい分野における航空技術開発**と**市場動向**を注視しつつ、**償却資産としての優良性が立証された（＝中古市場が確立された）航空アセットを投資家様にご提供**できるようサービスを展開して参ります。

※1 FAAは新たなカテゴリーを”powered-lift”運航と呼んでいます。
※2 大型なため自家用車のような個人宅等での離発着等は現時点では想定されていません。